

清代八股文における八股（提股・出題・ 中股・後股）と收股について（4）

The Eight Legs (Initial Leg, Revealing the Theme, Middle Leg, Later Leg) and Summary Leg of the Qing Dynasty Eight-legged Essay (4)

滝野 邦雄
Takino, Kunio

（2）規則

（i）『司徒貫易先生墨譜』

廣東開平の司徒德進（字は月瑞，號は貫易）の『司徒貫易先生墨譜』（道光二年〔一八二二〕自序：柱は『舉業度針』となっている）は，股法を「分股忌合掌」・「對法變換」・「題中小義不宜分股」・「各股挨題字順逆起法」に分けて次のように解説する。

まず，「分股忌合掌（対句となる二股が同じような語句を用いて文章を展開することを避ける）」として，提股・中股・後股・收股における対句（前の部分の句を出比といい，後の部分の句を對比という）の作り方を説明する。

なお，ここでいう「柱を立てる」とは，『制義綱目』に「立柱とは，一意にして二柱に分かつなり。或いは明にし或いは暗にす。夫婦・賓主の相い配するが如く，偏重無く，合掌無し。此れ陰陽 對待の義なり。明は陽に屬し，暗は陰に屬す。此れ又た陰陽 對待する中の陰陽なり」（雍正六年『制義綱目』不分卷・五十九葉・「立柱」条）とあるように，題目の内容を対句という二つの柱にして立てることである。

〔分股忌合掌〕前輩 文を論ずるに柱を鍊るを先にす。蓋し凡そ題に必ず義有り。凡そ義には必ず偶有り。一たび分かちて二と爲し，而して兩柱 立つ。所謂ゆる鍊なる者は，其の至精にして至切ならんと欲するなり。誠に

能く每股 兩柱を鍊出すること、雙峯並峙し、^{びったり}確切として移らざるが如く。此の詰題を以てすれば、則ち題堅きも自ずから破く。

[割注] 並峙の柱は、先輩の「君使臣以禮」(『論語』八佾) 一句題文の中股の禮の體用を以て分柱し、「禮の體 嚴嚴として以て冠履の分を辨じ(禮之體嚴嚴以辨冠履之分)」(出比)、「禮の用 和和として以て上下の情に通づ(禮之用和和以通上下之情)」(對比)の如し。何等(なんと)堅切ならんや。又た對比と出比ともて全反して同じく一意に歸する者有り、陳大士(陳際泰:字は大士。江西臨川の人。隆慶元年〔一五六七〕～崇禎十四年〔一六四一〕。崇禎七年甲戌科〔一六三四〕三甲二百三十一名の進士)の「爾愛其羊」(『論語』八佾「爾愛其羊,我愛其禮」)二句題文の中股の出比の「一羊を以て少しく貼と爲し,羊存するの意を註し(以一羊爲少貼,註羊存意)」,對比の「一羊を以て多く貼と爲し,復す可きの意を註す(以一羊爲多貼,註可復意)」の如きは、「少」・「多」の二義 反すと雖も、總じて見れば禮の愛す可きを^{あらわ}見す。此等の柱の意 尤も人の心目を駭かすに足れり。

但し並峙の柱は多く得る可からず。且つ多く用うれば、則ち局法 亦た板滯(融通が利かない)し易く、活潑流行の趣を^か少く。此の外、則ち活套(常套句)の分比の法有り。之を約言すれば四類有り。何れの題を論ずる無く、俱に用う可し。四法 左に列す。

出比本面 [割注] 這の事の本身(そのもの自体)に就きて説く。

對比對面 [割注] 旁人の這の事を看出するに就きて説く。

此れ一意もて兩意を分作し用いるの法。

一比時 [割注] 直に説く。

一比地 [割注] 横に説く。

此等の分柱は思議(言いたいこと)を尋ね易し。金[聲]・陳[際泰]・章[世純]・羅[萬藻] 最も善く之を用う。

出比淺 [割注] 且に淺一層に就きて説かんとす。○此の比 亦た須く

喫緊なるべし。痛癢（緊要）に着して看れば、此の一比の文字 已に人をして撃節（賞賛）せしむ。但だ其の意理（文の筋道） 下比に較べて畧ぼ淺し、話頭（話のいとぐち） 下比に較べて畧ぼ渾含（含蓄がある）なり、尚お未だ直ちに到底（徹底する）を窮めず。下比に對して言えば、則ち之を淺と謂うのみ。倘し此の比 痛癢に着せず、密圈を下す可からざれば、下比 佳しと雖も亦た減色す。

對比深 [割注] 深き處に追入す。

此等の股法 一步もて一步を進め、一層もて一層を深くし、螺旋にして愈いよ入り、蕉剝（芭蕉の葉を剥ぐように）にして愈いよ出だせば、最も「人を引きて勝ちに入る『世説新語』任誕にもとづく」に足る。○凡そ虚實遠近等の法 俱に淺深①の二字を以て之を該（包括）す。

出比開 [割注] 或いは反を用い、或いは陪を用い、或いは題の頂を推原す。前一層の道理 其れ未だ本題を拍（撃つ）せざるを以て、總じて之を開と謂う。

對比合 [割注] 本題を拍合（撃つ）す。

此れ流水對法②なり。兩比 一比の如くす。股法 最も活動すと爲す。○凡そ反正・賓主③・縱擒等の法 俱に開合の二字を以て之を該（包括）す（『司徒貫易先生墨譜』・不分卷・二十七葉～二十八葉・「分股忌合掌」条）。

①淺深：『制藝綱目』に「凡そ事の中より出づる者は、必ず先深くして後淺し、外より内にする者は、必ず先淺くして後深し。本より末に及ぶ者は、必ず先深くして後淺し、前より後に至る者は、必ず先淺くして後深し。此れ又た一定の理なり……」（雍正六年刊『制藝綱目』不分卷・六十葉～六十一葉・「淺深疏」条）。

②流水法：『司徒貫易先生墨譜』に「此の〔流水〕法 須く流動の中に於いて雄渾剛凝の概を見す……」（『司徒貫易先生墨譜』不分卷・

四葉・「提股」条割注)。

また、『制藝綱目』に「流水とは、或いは一意にして淺深を分かち、或いは一句にして兩層を分かちなり。此れ即ち陰陽の流行の義なり。一意にして淺深を分かち者は、暗にして陰に屬し、一句にして兩層を分かち者は、明にして陽に屬す。此れ又た陰陽の流行する中の陰陽なり」(『制藝綱目』不分卷・五十九葉・「流水疏」条)。

- ③賓主：『斯文規範』に「賓とは、客なり。乃ち主人の請う所の客なり。主 必ず客有り、客 必ず主有りて、方に一堂欣暢（愉快な）の樂有り。則ち之を文に通ずるに、凡そ文中 題面を直敘（直接的に叙述）すれば、便ち直率（率直）なるを覺ゆ。必ず主 客有り、客 主有れば、則ち文字 方に情趣有り。主客の聚まる處に就與して一堂歡欣（喜び）して暢遂（楽しむ）するに相似たり、故に之に名づけて賓と曰う。其の客を以て主を形あらわすなり（a）。此の法 處として有らざる無し。故に通篇より論じ、起講・前提・後束もて賓と爲せば、則ち中間・正面 即ち主と爲す。又た正面より論ずれば、前後もて賓と爲し、中間の兩大股 即ち主と爲す。更に各股に就きて論じ、股頭・股尾もて賓と爲せば、則ち各股の中間 即ち主と爲す。更に各股の字眼に就きて論ずれば、兩股の字眼の或いは虚を以て實に對し、淺を以て深に對するが如ければ、則ち上股の虚の字眼・淺の字眼もて賓と爲し、則ち下股の實の字眼・深の字眼 即ち主と爲す。處として有らざる無く、文の然らざる無し。知らざる可からず」(『斯文規範』卷之七・七葉・「一曰賓」条)。

- (a) 以客形主：『斯文規範』に「題の此に在るを重しとせず、是れ客と雖も、我 重しとせざる者に偏り、埋伏の法を用い、伏 定まり、後面以て之を作し、客 正に以て主を形あらわすを言うなり。前の「駕輕御重」(i)と名を異

にするも實を同じくす」（『斯文規範』卷之六・二十六葉・「一曰以客形主」条）。

- (i) 「題の實字 軽く、虚字 重く、直ちに題中の實字より虚字の神を發出するを言うなり……」（『斯文規範』卷之三・十四葉・「一曰駕輕御重」条）。

対句作成においては、題目の内容を二つの柱に分けて論述する。しかし、両者が対峙するような形のもの、多く利用できない。多用すると、固定化されてしまい、融通がきかなくなってしまうからである。これ以外には、「出比本面・對比對面（出比をそのもの自体から説き、對比を傍らから説く）・「一比時・一比地（出比を直に説き、對比を横から説く）・「出比淺・對比深（出比で外側から對比で内側から説く、もしくは出比で前から對比で後に向かって説く）・「出比開・對比合（流水對法：題目の内容を淺深に分けて説いたり、題目を二つに分けて説く）」という四種類のよく用いられる形式の柱の立て方がある。

続いて、「對法變換（対句を変換させる）」法について説明する。

〔對法變換〕墨卷の對股 固より工整（きちんと整っている）なるを以て佳しと爲す。然れども亦た間に變換する處有り。如し出比 「則」字を用いて接すれば、對比 「然」字を用いて轉ぶ。出比 正筆を用いて收むれば、對比 反筆を用いて收む。出比 本位（中心）を以て收むれば、對比 襯托（別のものを用いて際立たせる）を用いて收むの類なり。蓋し文章 當に兩比を合わせて一比と爲すべし。其の伸縮變換 原より參するに變通（融通をきかす）を以てす可し。且つ筆勢の縱横（自由奔放）夭矯（ほしいまま）の「方物（名状）す可からざる」（『國語』楚語下）は亦た往往にして此の處に於いて長^{あらわ}を見ず。但し必ず氣盛にして言宜しきは、實に得心應手（手際がよい：『莊子』天道に基づく）の方^{まさ}に運用す可きに在り。倘し稍や^も牽強^{こじつけ}に涉れば、反って事を誤るに致す。故に余（司徒德進）嘗て金正希（金聲：字は正希。安徽休寧の人。萬曆二十六年〔一五九八〕～光弘元年

〔一六四五〕。崇禎元年戊辰科〔一六二八〕二甲七名の進士の股法を論ずるの一條有りて、頗る能く曲つぶさに其の妙を盡す。今、敢て載入せず。正に虎を畫きて成らず、轉じてます滋ます流弊（弊害）あるを恐ればなり。揣摩家、此の法有るを知りて、時に随いて斟酌すれば可なるのみ。○乙丑（嘉慶十年〔一八〇五〕）會元の胡君敬（浙江仁和の胡敬）の「老者安之」（『論語』公冶長「老者安之、朋友信之、少者懷之」）の三句題文の後二比（後股）の對法の變換あじわ 玩あじわう可し。此れ蓋し方百川（方舟：字は百川。安徽桐城の人。康熙四年〔一六六五〕～康熙四十年〔一七〇一〕）の「歸與歸與」（『論語』公冶長「子在陳曰、歸與歸與、吾黨之小子、狂簡、斐然成章、不知所以裁之」）全章題文の後二比（後股）の筆意を摹倣するなり。○已上は専ら整對（整つた）の股法に就きて言う。既に是れ整對なり、故に變通（融通をきかす）を以て筆妙あらわを見ず。是の若ければ開合流水對は、則ち股法す已すで既に圓活①なり。轉接の間、又た虚字に換えるを多くせざるを以て能事しめを見ずなり。之を總ずるに、自然に恰好（ちょうどよい）を以て妙と爲す。一言もて盡す可きに非ず。○又た墨裁（八股文の選集）に上比（出比）に題字を用い、下比（對比）にも必ず題字を用いて對するを、乃ち能く穩稱（十分に整っている）とす。或いは另に一字を換えるも亦た可なり。惟だ必ず題中の字を要するのみ。金正希の如きは「今也純儉」（『論語』子罕「今也純儉、吾從衆、拜下禮也、今拜於上、泰也、雖違衆、吾從下」）三句題文の後股の上比（出比）の收に云う「吾寧從焉耳」と、下比（對比）の收に云う「吾何爲也哉」と。上比（出比）は題字〔の「吾從衆」〕を用い、下比（對比）は用いず。又た「既富矣」（『論語』子路「既富矣、又何加焉」）二句題文の中二比（中股）に云う、

富國之可以傲貧國也， 猶之乎庶民之可以傲敵民焉耳， 卽以今日之洋洋大風， 如齊晉者之宏且侈也， 而或無以大過乎魯衛， 此豈無故耶（出比）
 患富者之有時不如無財也， 亦猶患貧者之有時不如無民焉耳， 至如今日之僻處沃壤， 如吳楚者之壯東南也， 而或不免於夷狄之擯， 豈謂未富耶（對比）

と。上比（出比）は題字を用いず、下比（對比）は用う。此等の股法 原より當に兩比もて合わせて見るべし。「今也」（『論語』子罕）篇は是れ上明下暗②、「既富」（『論語』子路）篇は是れ上暗下明なり。其れ上明下暗なる者は、墨裁（八股文の選集）に入るを以て必ず失色（色があせる）を致す、切に鞏に效う莫れ。上暗下明に至れば、股法に淺深有るを以て論ずれば、尚お較や穩〔当〕なるを覺ゆ。然らば必ず正希（金聲）の筆力有れば、乃ち能く運掉（揺れ動かす）すること出色なり。此の二比を觀れば、何等の神力ならん。上比（出比）の收句の〔「此豈無故耶」は〕直ちに「教」字を走らし、却つて是れ虚もて含み並びに侵犯せず。下比（對比）の收句〔の「豈謂未富耶」は〕亦た股内の意を承け「教」字を走らさんと欲し、忽ち上截（題目とされず截去された題目の上の部分。ここは、「曰富之」を指す）に縮入し、「富」字に借りて反勸す。〔金〕正希（金聲）に非ざれば、孰れが能く此の絶世の筆妙有らん（『司徒貫易先生墨譜』・不分卷・二十九葉～三十葉・「對法變換」条）。

①圓活：『斯文規範』に「法を設けて本題の回護と爲し、題理をして圓活（融通がきいて生き生きする）せしむるを言う」（『斯文規範』卷之七・五葉・「一曰圓活」条）。

②明・暗：『斯文規範』に「此の兩股中に於いて題字を將^もつて明らかに指し出だして之を言うを言うなり」（『斯文規範』卷之三・十六葉・「一曰明寫」条）。また、『斯文規範』に「此の兩股中に於いて明らかに題字を説き出ださず暗に之を指す言うなり」（『斯文規範』卷之三・十六葉・「一曰暗寫」条）。

対句は、きちんと整っているのを好いものとする。しかし、出比に「則」字を用いて続いてきたならば、對比では「然」字を用いて轉換したり、出比に正筆を用いたならば、對比に反筆を用い、出比に題目の要点を説明したならば、對比で他の方面から際立たせるように変換する。対句は、出比と對比とを合わせてひとつのものとするため、融通をきかせるのである。筆の勢いの自由奔放なことは、

説明しきれものではない。ただし、こじ付けなどしてはいけない。

「題中小義不宜分股（題目のはっきりと分別できない内容については、対句にしてはいけない）」について、次のように説明する。

〔題中小義不宜分股〕凡そ題句の分布、各々義蘊（詳しくて深い含意）の宜しく疏〔通〕すべき者有りて、是れ兩扇・三扇・四扇題と謂う。「君使臣以禮」（『論語』八佾「君使臣以禮、臣事君以忠」）二句・「車同軌」（『中庸』第二十八章・第三節「車同軌、書同文、行同倫」）三句・「文・行・忠・信」（『論語』述而）四字の類の如きは、自ずから宜しく分股して之を發すれば、乃ち透關（透徹する）を得べし。其の兩句の疊出する有れば、兩事を分かつと雖も、却って甚だしき分別無き者なり。「立則見其參於前也」（『論語』衛靈公「立則見其參於前也、在輿則見其倚於衡也」）二句・「君子戒慎乎其所不睹」（『中庸』第一章・第二節「君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞」）二句の類の如きは、「立」と「在輿」と、「不睹」と「不聞」とは只だ同じく一様の事にして、甚だしき義蘊の分別する無し。[こうした題目の] 作文は自ずから須く通篇（一篇ひとまとめに）合發して、乃ち力量を見すべし。倘し題句に依りて分股すれば、便ち作法に非ず。即ち股中に好き句有り、[そして] 兩事に分かちて之を言うとも、其の實 合掌なり。再び細く書の理を講ずること有り、[そして] 題句 分布すと雖も、仍お當に合做すべき者なり。「老者安之」（『論語』公冶長「老者安之、朋友信之、少者懷之」）三句は「老」・「少」・「朋友」もて只だ随い舉げ、三項 以て天下の人を該（包括）す。程註に「夫子 仁に安んじ、[……] 天地の化工、萬物に付與し、己 勞せざるが如し [……]」と。乃ち是れ大主腦（最重要なもの）なり。若し題面に呆滯し、三大比に分かちて做せば、便ち顧だ貌 神を失す。故に[嘉慶十年〔一八〇五〕乙丑の會〔試の〕墨〔の「老者安之」三句題〕は、中間 輕筆分點（軽く要点を示す）し、前後に力を聚めて合發すること多し。而るに江西の元墨の關君作、竟に全篇もて合發し、只だ股内に於いて分點（要点を示す）し、以て眉目（筋道）を清くす。此れ見る所無きに非ず

して然るなり。又た「上老老」（『大學』傳第十章・第一節「上老老，而民興孝，上長長，而民興弟，上恤孤，而民不倍」）六句，「孝」「弟」「慈（不倍）」は只だ上章に沿りて随口（随意）に擧げ來り，一の「絜矩」の様子を作り，精神 全く下句に注ぐ。若し呆と三大比に分かちて做せば，亦た是れ神を失す。故に張曉樓（張江：字は百川，又の字は曉樓。江西南城の人。雍正元年〔一七二三〕癸卯恩科二甲六十一名の進士）先生の作は，通篇 俱に合を用いて做し，下句を倒影し翻入し，盤空（そびえ立て）屈注す，是れ神有りて迹無しと謂う。『四書』中の語言，此の如きの類甚だ多し。

〔割注〕「老吾老」（『孟子』梁惠王上「老吾老，以及人之老，幼吾幼，以及人之幼」）四句の如きは，亦た是れ此の類なり。

其れ宜しく合わすべし・宜しく分かつべからずは，乃ち一定の法あり。而るに淺學 往往にして題に依りて股を分かつ。豈れ好みて易き路を走り，正大に輸すれば便ち宜しきを知ればなるか（『司徒貫易先生墨譜』・不分卷・三十一葉～三十二葉・「題中小義不宜分股」条）。

兩扇題・三扇題・四扇題であっても，題目の要点は，当然それぞれ分けて柱とすべきである。そうすれば，はっきりと論述することができる。ただし，意味が重なっているようなものは，あまり分けても意味が無い。いくら，対句としてすばらしい対句を作成しても，實際のところ合掌（対句となる二股が同じような語句を用いて文章を展開する）となってしまうだけである。

「各股挨題字順逆起法（各股は，題目の文字によって順逆変換させる法）」については，次のように説明する。

〔各股挨題字順逆起法〕凡そ作文するに前幅（提股）・中幅（中股）・後幅（後股）の各處の起法 必ず須く變化錯綜（字句を顛倒させる）し，乃ち章法を成すべし。訣（秘訣）を得るに，只だ題字に挨着（頼る）して，順逆變換して起すのみ。提比（提股）は題の某字に挨（頼）りて逆起し，中股は則ち題の某字に挨りて順起し，後股は則ち又た題の某字に挨りて逆起す，或いは題の某字に挨りて中間は扣き起すの類の如し。

〔割注〕各處の應に順ずべき・應に逆すべきは、全く題を相て之を行なうに在り。此れ只だ其の〔一〕端を擧ぐるのみ。

一順一逆・錯綜變換は則ち既に之を板滯（杓子定規）に失わず、且つ離奇（尋常でない）の境界有り。然らば所謂ゆる某字に挨りて起す者は、必ずしも處處に某字を明拈（はっきりとつまみ出す）するに非ざるなり。或いは明にし或いは暗にす。

〔割注〕大約 必ず須く明暗 相い^{へだ}間つべし。如し某一字もて明拈して起せば、則ち某の一字 須く暗貼して起すべし。若し處處に明拈すれば則ち文法を成さず。

或いは反に或いは正にす、或いは離に或いは即にす、或いは陪襯（際立たせる）を用い、用筆 極めて變幻すと雖も、然れども每處に落想（構想を練る）す。大約 總じて須く題中の某一字に挨着（頼る）し意を起すなり。法に循い^な做し去き、是の法有れば則ち是の文有り。○題字に挨着（頼る）て順逆變換し起すと曰うと雖も、又た須く湊筭の法を知るべし。凡そ篇内 題字を將^もつて層次（段落）を分かちて出落^①す、出して某一字に到れば、下頭即ち須く此の字に緊接して起す、或いは明接す、或いは暗接す、或いは開接し、或いは緊接す。總するに須く此の一字の意を頂着（頂く）すべし、是れ湊筭と謂う。夫れ起法 既に出落の字を頂着するを要すれば、又た何ぞ順逆變換有りと言わんや。須く題字を出落するを知るべし。布局 層次に因る。凡そ布局 必ず順逆の勢い有るなり（『司徒貫易先生墨譜』・不分卷・三十七葉・「各股挨題字順逆起法」条）。

①出落：劉熙載（嘉慶十八年〔一八一三〕～光緒七年〔一八八一〕）の『藝概』に「出・落の二字 別有り。題字無き處より題字を點する、之を「出」と謂う可し。之を「落」と謂う可からず。題中の此の字より彼の字を出すに、彼の字に就きて言う、之を「出」と謂い、此れにより彼に之^ゆに就きて言う、之を「落」と謂う。出落の來路・去路を審らかにす、文の脈理 斯れ眞なり」（同治十二年〔一八七三〕

自序『藝概』卷六・經義概・四葉～五葉）。

提股・中股・後股の起法は、変化をつけるべきである。題目の文字に頼って、順逆を変換させて作る。それぞれの題目のある文字にしたがって提股で逆起すれば、中股では順起し、後股でまた逆起するようなもの、もしくは提股・後股はそのままで、中股に変化をつけるようなものである。順逆の変換を行なえば、杓子定規の解法ではなくなる。

（つづく）